

「入門期」の1年生での多様な体験を通し、自ら動き学ぶ意欲を育む

新潟県 上越教育大附属小学校

動物の飼育や自然の中での体験など、総合的な教育活動を充実させる上越教育大附属小学校。活動を通して、みんなで学ぶ楽しさと、人間関係を育むことによって、学校生活にスムーズに入れるようにすることをねらいの1つとする。子どもに出来ることは任せることで、伸び伸びと学ぶ姿勢や意欲が育まれているという。

取り組みのねらい

- 20以上の幼稚園や保育所から児童が集まるため、入学時に友だちがいない子どもも多い。子どもの人間関係づくりを支えたい
- 高い関心や意欲を更に伸ばし、一人ひとりの力を最大限に引き出したい

取り組みの内容

- 1年生から体験的な活動を充実させ、学校で学ぶ楽しさや、教室に自分の居場所があることを実感させる
- 子どもの自主性を大切にして活動をさせ、「やれば出来る」という自信や前向きな姿勢を育てる

子どもの変化・成果

- 教師からの指示を待つ態度ではなく、子どもが自らやりたいことを見つけて取り組むようになった
- 学校で学ぶことの良さや楽しさを実感し、教科の学習にも前向きになった
- 子ども同士のかかわりが増え、仲間や居場所づくりが進んだ

取り組みのねらい

体験的な活動を通じて1年生の人間関係をつくる

上越教育大附属小学校の子どもは、附属幼稚園を含め、上越市内全域にある20以上の幼稚園・保育所から入学する。そのため、子どもが受けてきた保育や幼児教育が多様であることが課題だった。副校長の神村大輔先生は次のように説明する。

「自由保育や一斉保育など、方針はさまざまですが、それぞれ意義のある活動だと思えます。小学校では、異なる環境で育ってきた子どもをいかに受け入れ、一人ひとりの力を

S c h o o l D a t a

◎1902(明治35)年、高田師範学校附属小学校として開校。校内は豊かな自然に恵まれ、校庭の他に広い原っぱがある。2012年度の研究主題は「自分らしい生き方をつくる子ども」



校長 加藤雅啓先生

児童数 459人 学級数 12学級

所在地 〒943-0834 新潟県上越市西城町1-7-1

TEL 025-523-3610

URL <http://www.juen.ac.jp/element/>

公開研究会 2013年6月28日(金)、29日(土) 予定

学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

伸ばしていく環境をつくり出すかが重要であると考えています。一人ひとりの力を発揮するきっかけづくりとして、自らが考えて対象に働き掛ける体験の充実を重視してきました」

同校の総合学習の研究は30年以上の歴史があるが、少子化が進む近年は、体験を通して人間関係づくりをいっそう重視している。幼少期から同世代とかわる機会が減り、友だちをつくるのがあまり上手ではない子どもが増えていると感じるからだ。指導教諭の関谷俊彦先生は次のように話す。

「本校の児童は多くの園から集まるため、入学時に友だちが1人もいない子どもが少なくありません。皆と一緒に活動に取り組み中で、打ち解け、仲良くなり、学校に自分の居場所を見付けてほしいと考えています」

1年生から体験を重視した「総合的な教育活動」を充実させ、子どもが小学校生活にスムーズに溶け込めるようにしている同校だが、1学年主任で総合単元活動主任も務める滝沢真紀子先生は、教師の意識にも課題があったと語る。

「以前は、1年生は何も出来ない、指導を1から始めなければという意識が強くありました。しかし、子どもは幼稚園や保育所でさまざまな体験をし、培ってきたものが多くあります。それを1年生でうまく受け継ぎ、更に2年生、3年生で伸ばせるようにしたいと考えました」

教育活動の考え方

*同校の資料を基に編集部で作成

充実・発展期

論理的、総合的に考えたり、生き方を考えたりする時期

移行・拡充期

活動を広げながら、多様な追求方法を身に付ける時期

入門期

多様な体験を通して、学校生活に適応していく時期

心の活動

集団活動

総合教科活動

教科活動

集団活動

総合単元活動

教科活動

総合単元活動

教科活動

1年生

2・3年生

4・5・6年生

取り組みの内容

1年生の「入門期」を土台として6年間の学びにつなげる

同校の教育課程の特徴は、1年生を「入門期」、2・3年生を「移行・拡充期」、4・5・6年生を「充実・発展期」と位置付けて、教育活動を組み立てていることだ(図)。入門期は「多様な体験を通して、学校生活に適応していく時期」としており、そのねらいを主幹教諭の青木弘明先生はこう話す。

「教育活動の区切りを低・中・高学年とせず、1年生を入門期として独立させているのは、この時期が6年間の土台として重要な



上越教育大附属小学校副校長
神村大輔 かむら・だいすけ
「子どもと共に活動し、力を最大限に発揮させたい。副校長として、全ての教職員の個性や能力を発揮させる」



上越教育大附属小学校
青木弘明 あおき・ひろあき
主幹教諭。「子どもは自ら学び取ることが出来る有能な存在であることを大切にしたい」



上越教育大附属小学校
関谷俊彦 せきや・としひこ
指導教諭。「子ども一人ひとりの喜怒哀楽に共感しながら、そばに居ることを大切にしたい」



上越教育大附属小学校
滝沢真紀子 たきざわ・まきこ
1学年主任。総合単元活動主任。「一人ひとりの良さを大切に、子どもと共に学び、活動を充実させたい」



上越教育大附属小学校
黒岩昭伸 くろいわ・あきのぶ
1学年担任。図画工作科主任。「子どもに寄り添い一緒に学び、共に笑い、共に泣く教師でありたい」

時期だからです。1年生で培った力を基にして、2年生以降は多様な力が身に付くように活動を広げていきます」

同校は、1〜3年生の「総合単元活動」と、4〜6年生の「総合教科活動」を総合的な教育活動の中核としている。総合単元活動では、動植物の飼育・栽培、活動の基地づくり、変身などの創作活動、探検など、子どもにとっ

て興味深い活動を行う。多様な体験を通して、教科学習でも重要な意欲を育み、人間関係を築き、落ち着いて学習に取り組めるようにする。そして、総合教科活動では、里山の暮らしや家畜の肥育、地場産業や町づくりについて体験を重ね、教科横断型の活動を行う。1〜3年生での学習・体験を受けて、今日的でより複雑な課題に取り組む。

特に、1年生は体験活動を充実させるため、総合単元活動に生活科、図画工作、道徳の内容を含め、総授業時数の3分の1以上の時間を充てる。また、授業を30分単位で区切り、チャイムを鳴らさないことで、教育編成の自由度を高め、活動の連続性を保っていることも、同校の特徴である。

教師は子どもの自主性を尊重し 自由な活動をサポート

2012年度、1年生の総合単元活動のテーマは、1組が羊を飼育する「もこもこぼくじょう」(写真1、2)、2組が原っぱで木箱などを使って遊び場を作る「つくってどんどん」(写真3、4)だ。教室で今日の活動の見通しを立て、屋外に出て活動し、教室に戻って振り返りを行うことが多い。

1組の「もこもこぼくじょう」では、4頭の羊を飼育している。担任の滝沢先生は次のようにねらいを説明する。

「羊との交流を通し、子ども同士がつなが

写真1 「もこもこぼくじょう」の様子。毎日、羊を小屋からえさのある原っぱまで連れて行く。授業前から率先して世話をする子どもが大勢いる



写真2 保護者に活動を知ってもらうために何をするかをクラスみんなで考える



写真3 「つくってどんどん」では、子どもがのこぎりやペンキを使って遊び場を作り上げる。教師は活動をサポートすると共に安全を確保する



写真4 原っぱで大きな木箱を見つけた子どもたち。自分たちで運べないと分かったら、リヤカーを持ち出し、協力して運んでいた



り、学校を楽しい場所と感ずることを最も大切にしています。そのような気持ちで学ぶ意欲につながると思っています。実際、『羊がいるから学校が楽しみです』と話す子どもが大勢います」飼育を始めてから約8カ月が経過した11月には、自分たちよりも体の大きい羊を巧みに誘導し、子どもだけで飼育小屋から原っぱまで行き来させる姿が見られた。最初は「こうしたい」と思っても、なかなか行動に移せないことが多かったが、子どもに任せる部分でだんだん増やしていくことで、次第に自分たちで考え、活動するようになったという。

「飼育を通して自分の行動を認められ、『やれば出来る』という自信を付けることで、『次

はこうしたい』という意欲が高まっています。この積み重ねが、主体性や協調性、社会性を育むのだと感じます。クラス全員が本気になる『向かえるもの』が学校生活の中心にあることは、子どもが小学校に適応していく上で非常に重要です」(滝沢先生)

一方、2組の「つくってどんどん」は、子どもが校内の原っぱにある木箱など(意図的に教師が置いたもの)を活用して、自分たちの遊び場「どんどんアドベンチャー」を作る活動だ。担任の黒岩昭伸先生は教師の役割を次のように話す。

「子どもの『もつとこうしたい』という気持ち大切に、教師はあくまでもサポート

学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

役に徹してタイミングよく材料を提示するようになっています。子どもたちは感性が豊かで、やりたいと思っていることがたくさんあります。自由な活動を保障することで、自分から動き出す意欲や行動する力を育てていきたいと思えます」

4月には子どもがばらばらに遊ぶ姿が見られたが、徐々に子ども同士のかかわりが生まれ、遊びがつながり活動へと変化してきた。

滝沢先生も黒岩先生も、学校教育目標を意識しつつも、「この力をここまで伸ばす」とはあえて定めず、まずは創造力や行動力などを広く育むことをねらいとしている。

「総合単元活動の指導では、『到達目標』ではなく、『方向目標』を重視しています。元来1年生が持つ意欲を重視し、『こんなことに興味があるから、こういう力が発揮されそうだ』と察し、教育をコーディネートするのが教師の役割だと考えています」（関谷先生）

子どもの変化・成果 学ぶ楽しさや面白さを実感し 教科の学習にも前向きに

こうした自由な活動は、子どもが学校で学ぶことの良さや楽しさを実感し、国語や算数などの教科学習の前向きな姿勢にもつながっている。授業で聞く内容や課題に自らかわろうという意識が高いため、学年が上がっても自分の考えを述べる意欲を失わないとい

う。また、保護者からは、家庭でも学習に取り組む姿が多く見られるようになったという声が寄せられている。

「たっぷりのめり込める体験が学びの中心にあることで、自分がかかわりたい、表現したいという気持ちも他教科にも波及しているでしょう」（神村副校長）

総合単元活動の今後の展望として、子どもの言語活動や集団活動を教科や特別活動の視点から見つめ、活動の意味を明らかにしたいと考えている。更に、活動の自由度が高い分、図画工作や道徳の内容がきちんと含まれているかを、常に確認しながら取り組む必要性も感じている。

「長年行っていると、どうしても活動が似てきます。しかし、6年間の成長を考えた時に、『本当に、飼育するのは羊が良いのか』など、活動の意味を問い続けなければならぬと考えます。そして、目新しい対象に飛び付くのではなく、地味でも、子どもが各学年の発達上の特性によって成長するような活動を取り入れていきたいと思えます」（青木先生）
そのためにも、教師が広い視野を持つことが必要だと強調する。

「目の前の子どもが大人になった時、どんな力が必要になるのかという見通しを持つことが大切です。そのためにも、私たちも社会に目を向け、いろいろな人とかかわり合って、自身を磨いていきたいと思えます」（関谷先生）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長・副校長の役割

保幼小接続は、まず保育所・幼稚園と小学校が目的を共有しなければ動き出しません。最初に話を切り出し、保幼小が互いに接続のテーマやねらい、課題を考えられるようにすることを心掛けています。

具体的な内容は担当者に任せますが、担当者同士の意思疎通がスムーズにいかない時は、双方が歩み寄って合意形成し、連携できるように中心となって導くことも大切な役割だと考えています。

副校長 神村大輔先生

ミドルリーダーの役割

自ら実践すると共に、保育所・幼稚園の研究にも深くかわり、幼児期の様子をレポートなどにまとめ、小学校の先生方に伝えるようにしています。

また、子どもには「自ら学ぶ力」があります。教師はつつい自分がかかるルールに乗せようとしがちですが、「待つ」ことも必要です。しかし、待つことは難しいものです。子どもの力を信じて待つ姿を、他の先生方に示すことも、役割の1つだと考えます。

総合単元活動主任 滝沢真紀子先生